

日常言語における意味の生成： You know と I mean の役割

田中茂範・石崎俊
慶應義塾大学環境情報学部

本研究¹は、日常言語（活動）の「文法」を解明することを目標とする。われわれは、文法を「意味づくりの機制」としてとらえ、日常言語においては、意味断片の連鎖、交錯、重畳、引き込みなどを通じて、意味が共同作業的に紡ぎ出されていく、という点を重視する。そこで、日常言語の文法の構築を図るには、「意味をつくる」という作業それ自体を観察し、モデル化することが要請されるわけだが、本稿では、その意味生成作業において重要な役割を果たすと考えられる *you know* と *I mean* の機能分析を試みる。*I mean* は自己指向、*you know* は他者指向の意味調整の手段であるが、両者の相互作用が、会話の共同作業性を反映する。

Meaning Making in Conversational Language:

The roles of *you know* and *I mean*

Shigenori Tanaka and Shun Ishizaki
Faculty of Environmental Information
Keio University

Conversation involves an open-ended collaborative process of meaning making, of which the basic unit is what is called "a chunk" or a meaningful fragment. We assume that two fillers, *you know* and *I mean*, play a major role in the whole process of meaning-making in communication. This paper examines the functional properties of these two fillers, on the basis of the analysis of a conversational corpus (approximately 30,000 running words), showing that *you know* and *I mean* are functionally rich, with *you know* being a hearer-oriented meta-expression and *I mean* being a speaker-oriented one. This paper also discusses the relation between position and function of the two fillers.

¹本研究は文部省科学研究費（重点研究 00245614）の援助を受けて行われたものである。

1 まえがき

私たちが「文法的記述」とか「文法的考察」というとき、《文》を言語単位とするという了解事項に基づいた言語学的作業を指すのがふつうである。しかし、日常言語を記述しようとする、文が完結しない発話に直面することが度々である。たとえば、下の会話例をみてみよう。

D: It's much more fun before they fall in love with you, isn't it? When you're trying to get them?

J: Right. Having to, you know — and she's just like, not giving you the time of day. Yeah, I...I was madly in love with a girl in my boarding school.

《文》を単位とした分析では、having to とか she's just like などは「不完全な文」あるいは「正規文からの逸脱」として処理される。しかし、日常言語のやりとりにおいては、こういった「断片的な」表現の連鎖で談話が構成されることが少なくない (Tannen 1989; Chafe 1985; 石崎・田中 1994)。そこでひとつの問題が出てくる。つまり、日常言語の構成単位は《文》だろうか、という根本的な問題である。結論を先にのべておけば、(これはあくまでも隠喩的な言い方だが)《文》は「断片」が引き込み合った結果の産物であって、日常言語で意味を紡ぐ際の構成単位ではない。言い換えるなら、話し手同士は、言いたいことを、ただいおうとするのであって、《文》を意識しているわけでは決してない。言いたいことをいおうとすると、情報を完結する〔つじつま合わせをする〕という方向に言葉が配列され、それを産物として分析してみれば、《文》が構成されていることもあれば、そうでない場合もある。《文》単位の分析はこの自由度を許さないのだ。

日常言語活動 — ここでは、もっともリラックスした状態におけるおしゃべりと定義する — においては、断片が断片を呼び起こし、それらが引き込み合って意味的なまとまりをつくり出していく、という状況が想定される。そこで、日常言語のテキストを記述するには、《文の連鎖》というより、《断片の

連鎖》という発想転換を図る必要がある。なぜなら、繰り返しというが、そこでは《文》は必ずしも完結されないからである。

2 日常言語の文法の構図

上でいう「発想転換」を受けて、日常言語の文法の構図を描けば、どうなるものになるだろうか。われわれは、以前、日常言語の文法を次のようにスケッチした (石崎・田中 1994)。第一に、文法とは「意味を組み立てる機制」であり、言いたいことを思いつくまま話すという要請に応えられるものでなければならない。第二に、その要請に応えるためには、情報を必要に応じて追加するという仕組みが組み込まれてなければならない。第三に、情報追加の単位は、文ではない。なぜなら、上で示したように、日常言語は、文の連鎖によって構成されているとは思われないからである。そこで、「意味のかたまり」として《チャンク》という単位を導入した。第四に、チャンクは、全体に対する部分ではなく、全体を前提としない《断片》として特徴づけられる。チャンク断片の連鎖は、意味的なまとまり感 (関連性) を出す、という全体化の方向に流れる (といっても、全体が閉じるということはないのだが)。第五に、意味的なまとまりのある全体化は、直線的に進行するのではなく、言い直し、言い淀み、放棄などの軌道修正が絶えずおこなわれながら試行錯誤的に進行する。慣習化したやりとりであれば、一定のボタンが自動化されており、軌道修正の必要はあまり認められないが、何か考えを即興で話すという場面では、大いに軌道修正が行われる。それは、線形的 (linear) な言語を重奏的 (polyphonic) なものにする、といってもよい。

この構図にしたがえば、かなり自由な言語活動が許されるが、デタラメに意味が作られるというわけではない。そこで、第六の特徴として、それは、語順などのような原基的な構造図式 (schema) に従うという点を指摘しておかなければならない。これは、規範という問題と関連してくる。言語について語るには、規範をどうみるかという規範論の展開を無視することはできないが、私たちは、「規範」という概念を緩やかな図式でとらえる。規範という概念は、正しいものと間違っただけを区別する基準を連想さ

せ、会話を文法規範からの逸脱文とみなす見方を与えるからである。むしろ、「逸脱」は異常事態ではなく、常態である。だとすると、文法（構造）図式の伸縮性を連想させるストレッチという概念が「逸脱」という概念にとってかわることになる。ストレッチの可能域は耐久力（トレランス）によって指定される以外ない。しかし、トレランスの水準を越える構造図式のストレッチは、当該言語の破壊につながるが、この点については、本稿では取り上げない。以下では、「意味づくり」という視点に具体性を持たせるため、you know と I mean の働きについて考察する。が、その前に日常言語の特徴である「チャンキング」について一言ふれておきたい。

3 連鎖反応としてのチャンキング

自省してみればすぐにわかることだが、何かを話そうとした場合、完全な文がいきなり浮かんでくることはなく、むしろチャンク（断片）が連想され、そしてそれが別のチャンクを呼び起こすという連鎖反応—チャンキング—が意識される（人工知能モデルにおけるチャンキングについては、Laird, Newell and Rosenblood 1987 参照）。だからこそ、言いたかったことと実際に言ったことを較べてみると、一致しないということが起こるのであり、いってみればチャンキングの向かう方向までを規定する文法はないのだ。具体例を見てみよう。下の例は、米国での賭博に対する政府対応について話している場面の一駒である。

[In the States], [米国では]
 [when they first started lottery]
 [彼らが宝くじを始めたときは]
 [and a lot of the states were saying], [多くの州で言っていたよ]
 ["No, no, no we don't allow gambling.]" [だめだめ。賭博は認めない]
 [You can't gamble"], [賭博はしちゃいけないんだ、と]

[and they changed the law] [そして、法律改定をしたのさ]
 [because they realized] [というのは彼らも分かったんだね]
 [how much money the state could make.] [どれぐらい儲かるかってことが]

[when they first started lottery] の箇所に着目してみよう。ここでは、この従属節を閉じるための主節がすぐには導入されず、そのまま [and a lot of the states were saying...] と、意味的には関連しているが文法的には無関係なチャンク（群）を導入している。これはチャンキングがいわゆる文法を「逸脱」する例である。[a lot of states were saying...] と述べてそれを連鎖反応的に受けて [and they changed the law] という。ここでの and は「そんなことを言っていたくせに」という先行チャンクの内容と意味的に関連づける機能を持つ。チャンクがチャンクを連鎖反応的に呼び起こし、意味的にまとまりのある流れを形成していく、この日常の言語活動ではごくありふれたチャンキングのプロセスを「全体化」と呼ぶことができようが、チャンクは全体を想定する《部分》ではなく、全体を想定しない《断片》としてここでは特徴づける。その理由は、全体化のプロセスが閉じることがないというだけでなく、予定調和的な全体を予見することもできないからである。断片が断片を呼び起こし偶発事を生み出す、ここに断片の力を私たちはみる。

4 You know と I mean

会話の全体化の流れは、テキストとしてみれば、その編集過程、情報の組立の過程としてとらえることができる。全体化は、軌道修正（関連性を整える作業）を伴いながら行われる共同作業である。「反復」の全体化への貢献は Tannen (1989) によって詳述されている。ここで取り上げたいのは、you know と I mean の働きである (Schiffrin 1987; Oostmann 1981)。文体的に言えば、you know と I mean は「くだけた会話体」の印 (marker) とされ、一部の人の間では「言語の乱れ」の兆候として槍玉にあげられている。これらの表現を言語の乱れの兆候とす

る見方の背後には規範主義が潜んでいるが、私たちはここで文体の社会評価の問題に立ち入ることは避け、むしろそれらの表現の積極的な意味を探っていきたい。

私たちの立場からいえば、言語の形に気をとられずに「自然に」繰り広げられる《くだけた会話》こそが日常言語の祖形であり、そこで多用される you know と I mean の分析は、日常言語の「文法」を考察していく上で重要な示唆を与えるものである。ここでは、まず両表現の機能的特徴を会話資料にあたりながらみていく。

ここで用いる日常言語資料は、アルク出版社の協力を得て、英語を母語とする人たちの生のおしゃべりを収録したものである (CHATDATA と呼ぶ)。資料は約 3 万語に及び、その内訳としては、25 の話題についての各々 3、4 分のおしゃべりから成る。まず、2 表現の頻度数を表すと以下の通りである。

mean	125	I mean	90
know	309	you know	194

動詞の mean は that means、do you mean、I know what you mean などの形でも現れるが、フィルター (filler: 挿入語) としての I mean が 90 回使われている。know についても同じく、I don't know about、Kyoto is known for、I know などすべての頻度を出し、その中でフィルターとしての you know だけを抽出してみると、194 回にも及んでいる。頻度的にみれば、you know が I mean の約 2 倍になっている。これは、他者指向性の高い対話の特徴の現れであるといえよう。

次に、2つのフィルターの生起位置と頻度を表にしてみよう。ここでは、節 (clause) を単位とし、節頭、節内、節尾の三カ所を分析のカテゴリとする。ここでいう節は、主節と従属節の両方を指す。3つの位置と you know と I mean の関係を示したのが以下の表である。

	節頭	節内	節尾	総計
I mean	72	13	5	90
you know	61	69	64	194

なお、位置と表現の関係をカイ 2 乗検定により統計的に見てみると、有意な関係があることがわかった ($\chi^2 = 59.497$, $df = 2$, $p < .001$)。

I mean は話し手が自ら流れを調整しようとする印であり、節の始めにもってくる傾向が強いことは当然のこととして予想されるが、それに対して、you mean は頻度が高いだけでなく、位置的にもほぼ均等配分されている。

4.1 You know の機能

you know についていえば、節内の位置が構造的に複雑であるが、機能的には 5 つに分類できそうである。まず第一に、意味的にまとまった語句の直前に you know を差し挟むことにより、ひと呼吸置き、相手の注意を喚起し、そしてそれにより後続の内容を強調するといった効果が考えられる。ここでいう「意味的にまとまった語句」とは、名詞節、関係代名詞節、不定詞句、あるいは分詞構文、前置詞句など副詞的要素などである。下の例は、関係代名詞節の直前に you know を置いている。

L: And they have the plastic buckets, *you know*, [that look like a jack o'lantern], and they do have pumpkins but ...
E: People don't hallow them out and carve the face.

第二に、相手に馴染みなる事柄を導入することで別の語句の説明を行う場合が観察された。例えば、下の例では、you know を挟みながら little things を collages and stuff と具体化している。

V: I love autumn because leaves are so many different colors and they fall off and you can pick them up and make little things, *you know* — collages and stuff.

第三に、話題として名詞句を先に言い、you know を挟み、続いて話題の叙述を行うという例もみられる。下の例では、The Japanese guy が話題化されているだけでなく、underneath も話題化の場合とみなすことができる。

J: Yeah, The Japanese guy — *you know*, he did, um, he had his own technique where you jump in the water, and underneath, *you know*, you wiggle your back legs for a bit, and then you surface, and you ...

第四に、*you know* は、組み立てかけた構造を放棄し、再度組み立て直すことをシグナルするという機能がある。下の例では、*it's hard to* の後が続かず、*you know* を埋め草的に挟み、*I mean* によって再度、意味の組み立てを試みている。

L: I mean you have to own that language. We were given English. We were never taught English. So it's hard to, *you know*, I mean it must be a terribly strange language to learn when you've got, especially in Japan, *you know*.

そして第五に、*you know* は、語句が思いつかないとか、言いにくいことをいう前とか、リズムを整えるために使われる場合も少なくない。位置的には形容詞、助動詞、動詞などの前に置かれる場合が観察された。

T: Well, the smell of the salt is fine, as you're walking to the bar to have a nice gin and tonic late in the afternoon. I can like that, but you have to go swimming... like sports — I can get, *you know*, like, jet skiing or water skiing or something. That'd be good.

次に、節頭の *you know* は、会話の役割交代の際の話の切り出しに使われることが多く、機能的にはむしろ限定されている。Schiffirin(1987)も指摘していることであるが、*you know* は exchange structure に関与し、割り込み・話題の導入を可能にする。この資料では、節頭にあらわれる61回の内、33回

が割り込み・話題の導入の目的のために使われている。ただし、*you know* がそのまま使われる場合と *well you know*、*but you know*、*yeah you know* のような形で使われている場合とがある。

J: ... It doesn't stay cold — hot all night, but you know, you just put it down at the end of the bed and stuff.

Di: Well, *you know*, the greatest invention is these hokalon, the little hot packs that you shake to activate the heat?

さらに、節頭の *you know* は、決まり文句などの前(節前)に置き、ひと呼吸置くことにより、決まり文句へ焦点当てるという効果が Schiffirin(1987)に指摘されているが、私たちの資料でも観察された。

L: They really are, because they don't know anything.

M: Right, right — and they're just discovering it.

S: *You know*, kids are kids, and when they reach puberty and pretend, and the hormones go crazy...

次に、節の終わりに置く *you know* を簡単にみておこう。まず、節から次の節に移行する際に *you know* を置くと、それは先行する節に意味作用し、同調を求める作用を発揮する。

J: But wait a minute. Come on. This is getting rather silly. I want I want to say about about seasons, *you know*. I used to live in Kyoto for a while and of course, Kyoto is known for the four, the four climates.

ここでは、(話がばかばかしくなってきたところで) Jが割り込み、「季節について話したいんだよ」

といい、you know で同調・共感を求めている。典型的には、you know? のように上がり調子のイントネーションで使う。さらに、節の終わりに you know を置くことにより、「言わなくてもわかるでしょ」と相手に同調を求める場合が多い。

M: I'm a very conservative person from a very small town in Mississippi, *you know*, like the Bible Belt, *you know*.

「私は保守的ななのよ」という理由として「ミシシッピの小さな町出身だから」とだけのべ、後は you know といったものの、情報が足りないと感じたのか、like the Bible Belt, you know と付け加えている。

役割交替の機能の you know は、「これから私が話すことは、現在進行中の会話に関連がある」という意味合いの信号を相手に与えるが、相手に判断を委ねる you know は「これ以上、しゃべらなくても分かるでしょう」という意図を伝達しうる。この2つの you know は、一見、相入れないが、いずれの場合も「他者へ投げかけ」と「相手との知識共有を確認する」という原基的機能においては共通している。そして、他者への投げかけは、進行中の対話の共同作業性をその都度再認する効果を持つ。

4.2 I mean の機能

聞き手志向の you know に対して、I mean は、話し手志向であると上で指摘したが、機能的に I mean を見ると、関連情報の追加、言い直し(構文的修正)、念押し、理由づけ、(先行語句の)明瞭化、言いよどみ、(やんわりとした)反論、割り込み、結論化の9項目を析出することができる。

1. 関連情報の追加

V: Well, this season is particularly nice because of the cherry blossoms. *I mean* any day now we're going to be in cherry blossoms.

2. 言い直し(修正)

De: So your first love. When was - when you really felt - fell in love, about how old were, *I mean*, when you really felt like this is real serious?

3. 念押し(強調)

M: But I found the seasons in Japan, although they're very specific and they change. I don't think they're as ... um ... um ... what's the word I'm looking for ... as extreme! As extreme as the seasons, like I'm from New York, *I mean*.

4. 理由づけ

V: Well, I know that's been true for me.

J: It's been true for me, too. *I mean*, my folks have lived in the same house for umpteen hundred years but...

5. (先行語句の)明瞭化

S: It's real regional, though. *I mean*, that's not something that's celebrated outside of New York City.

6. 言いよどみ

J: Well, actually, *I mean*, I like kotatsu, but, uh, I live in a small Japanese apartment, so there's really no room.

7. (やんわりとした) 反論

S: That's true, but *I mean*, humor does heal.

8. 結論化 (先行する話を一気に結論に導く)

S: You can talk and talk and talk, but *I mean*, if something physically changes in them and they, you know, and they become very curious about - *I mean* face it, guys, we all went through this.

9. 割り込み

W: Yeah, newer, younger girls now.

M: *I mean*, if they had the dream, if the dream was there that, "Yes, I can be president of his company..."

W: Oh I see what you mean, it would give them more incentive.

「関連情報の追加」というのは分類上やや漠然としており、「理由づけ」あるいは「明瞭化」との峻別がむずかしいという印象を与えるかもしれないが、先行情報の理由をのべているわけでも、特定の語句についての説明を行っているわけでもなく、ただ内容的に関連した情報を補充している場合が多々みられ、そういう場合を分類するために設けたカテゴリーである。

Schiffrin (1987) は、*I mean* の特徴として「命題情報 (idea)」と「意図 (intention)」との両義性を挙げているが、この区分によると、「言い直し」「明瞭化」「言いよどみ」は<命題情報の構成>に関わり、「関連情報の追加」「理由づけ」「反論」「割り込み」「結論化」は<発話意図の明示化>に関与する。「念押し」の *I mean* は、先行するチャンクをその対象

とし、他の場合と異なるが、命題情報の構成というよりも、発話意図を明示する手段であるといえよう。

I mean は、修正内容に焦点を当てる機能を持ち、構造的には *I mean* x の x が修正内容にあたる。フィーラーとしての *I mean* は *I mean* と x が分離する形を取るが、通常、x は *I mean* の直後に来るチャンクに相当し、位置的には *cataphoric* な関係にある。*I mean* は先行する内容 (prior discourse) が不十分であるという感覚に動機づけられるという意味において、「置き換え修正 (replacement repairs)」の機能を持ち、in other words に意味的に近い (Schiffrin 1987: 302)。ただし、「念押し」の *I mean* の内容となる x は、その直前のチャンクであり、この場合だけが唯一 *anaphoric* な関係となり、それ以上の置き換え修正を要請しない。

なお、「割り込み」の *I mean* は、you know の場合が新しい情報を導入できるのに対して、自分が前にいった内容に言及しつつ、意図を明示化するという特徴がある点を指摘しておこう。

位置については you know の場合と同様に、節頭、節内、節尾の3箇所を考慮した。機能と位置の関係を数量的に示すと以下ようになる。

	節頭	節内	節尾	総計
関連情報の追加	18	0	0	18
言い直し	3	10	0	13
念押し	0	0	5	5
理由づけ	14	0	0	14
明瞭化	17	0	0	17
言いよどみ	4	2	0	6
反論	6	0	0	6
割り込み	7	0	0	7
結論化	3	1	0	4
総計	72	13	5	90

この表から明らかなように、*I mean* は節頭に来る傾向が圧倒的に多い。これは、you know の分布パターンと対照的である。機能的には、節の中で使われると、構文的にまとまらないため、言い直しを行う際に *I mean* が使われる傾向が強い。節の終わりに *I mean* がくる頻度は相対的に低い。機能的には、念押しを意図している用例に限定されていた。

5 おわりに

そもそも文法は、意味を組み立てる機制である。「言いたいことを思いつくまま話す」というのは会話が要請する基本原理である。そのためには、情報を必要に応じて追加していかなければならないわけだが、情報追加の過程において、ストーリーが始めから完成しているわけではなく、話しながら展開させるという生の言語活動の中で「言い直し」「言いよどみ」「話題の放棄」などの現象はごく自然に起こる。その結果として、会話の流れは《文》の直線的な線上をなだらかに進むというより、むしろ、自己修正を行いつつ、断片が断片を引き込みながら意味的なまとまり感を生み出していく、という姿をみせる。

そこで重要な働きをするのが、you know と I mean である。You know what I mean. とか I know what you mean. という表現から読み取れるように、これらの表現は「意図・解釈」と密接に関係している。つまり、対話とは意図と解釈をめぐる言語的やりとりであり、両者の擦り合わせがその活動の中心課題となる。すなわち、I mean は「意図」を明示するメタ表現であり、I mean と表現することで、話し手は、後続する発話に対して「これが私の意図だ」という枠填を行う。そして、それにより「意図」の明示化を図ることができる。それに対して、you know が相手の投げかけられると、それは「解釈作業」を「強要」すると同時に「解釈」の「確認」を取りつける機能を持つ。したがって、You know what I mean. という表現は「意図が伝わっているか否か」を問い、I know what you mean. は「意図が解釈された」ことの確認表現となる。上で取り上げた you know と I mean は、You know what I mean. の構成要素であり、それはともに発話者の立場から発せられる表現である。

私たちは、言語活動のさなかにあって、I mean (意図の組み立て) と you know (その伝達可能性) を絶えず意識しており、それらをスクリプトに従わない生のおしゃべりにおいて連発する。ところが、これらの表現は意味づくりの現場をそのまま — 編集作業にかけられないまま — 相手にさらけ出してしまうため、文体的には洗練された印象を与えず、「言語の乱れ」の印というスティグマを与えられてしまう。しかし、「人は意味をどのようにして紡ぎ出しているのであろうか」という根源的な問題に接近する

には、「乱れ」という価値づけを留保しつつ「意味の調理場」に分け入っていかなければならない、と私たちは考えている。

参考文献

- Chafe, W. 1985. Linguistic differences produced by differences between speaking and writing. In D. Olson, N. Torrance, and A. Hildyard (eds.), *Literacy, language and learning: The nature and consequences of reading and writing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 石崎俊・田中茂範 1994. 「対話文理解のための解析手法と認知意味論モデルの研究」『音声・言語・概念の統合的処理による対話の理解と生成に関する研究』(重点領域研究研究成果報告書) .
- Laird, J., Newell, A. and Rosenbloom, P. 1987. SOAR: An architecture for general intelligence. *Artificial Intelligence* 33: 1-64.
- Oostmann, J. 1981. *You know: A discourse-functional approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tannen, D. 1989. *Talking voices: repetition, dialogue and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.

謝辞

この論文の作成に当たって、中村太戯留君に大変お世話になった。ここに感謝の意を表したい。